

松村通信第96号

2018年6月15日
松村勝弘

東洋の普遍、西洋の普遍

定年後、関心は多方面に広がり、まとまりが付きません。かねてよりのコーポレート・ガバナンス論への関心を軸足に据えて、研究を進めているつもりですが、やや散漫になってきているようにも感じています。

道徳を基礎づける 相変わらず、経済学部小野進名誉教授とのメールのやりとりは続いています。そこで紹介されていた中島隆博東京大学教授に関心を持つようになり、調べていると大変に面白い。東京大学の東洋文化研究所公開講座 2017 というのが YouTube にアップされているを知りました。そこに哲学者、とりわけ東洋哲学研究者で中国哲学と西洋哲学の比較研究者・中島隆博氏による「アジアを越えて循環する知」というのがありました (<https://www.youtube.com/watch?v=HEAPNzHoXJE>)。神ではなく人間の理性で道徳を基礎づけることができるかというところから始まるのですが、難解な哲学を易しく話されてました。おすすめです。でも、すべてを理解するのは困難でした。

いわく、今日世界は分裂、断片化している。そこでは礼・規範が必要になっている。規範は断片化した時代に必要であるが、実は古代中国もそういう社会だった。儒教はそこで生み出された。礼・規範・道徳が発明された。礼は心の問題である。しかし、現代のようにポスト世俗化の時代には宗教は退場してしまっている。実は宗教は心の問題だった。近代は世俗化の時代である。しかし今や、規範・礼、宗教のようなものが必要になっている。世俗化で宗教を簡単に捨て去ってはいけなかった。そこで最近は様々な形の宗教復興が起こっている。

ヨーロッパ近代には中国の影響 実はカントなどの近代の手前に中国哲学・儒教があった。中国の哲学は無神論にもとづく道徳だった。16世紀末から17世紀、宣教師が中国に来る。そこで彼らが見たことはなんだったか。中国は経済力・文明が発達していた。そして宣教師はびっくりした。そこで知ったことは、聖書は最古じゃなかった。中国の経書は聖書より古いことを知った。中国は神なしでうまくやってきたことを知った。さらにまたエジプトのほうが古いことを知った。キリスト教

の権威を否定し、理性的客観的に物事を考えようとしてカントは、神なしで道徳を基礎づけようとした。うまくはいかなかったが。当時のヨーロッパの中国ショックはかように大きかった。ヨーロッパ近代の啓蒙は中国の影響のもとにあった。こういうことは現代の欧米中心主義の潮流の中で、振り返ることが必要だと、中島氏の講義を聴いて痛感しました。

中島氏はさらに続けて言う。孔子は人間が人間であるために礼と仁を実現しようとした。よく human being ということばがあるが、孔子は仁 = human becoming を考えた。感情によって人間を変えていく。それが必要だと考えた。礼とは何か。礼 = 感情を訓練 (トレーニング) する、変えていく、ここに道徳の基礎がある。計算ではなく、感情にもとづく。孟子は性は善にもとづくとして。人間は生まれながらに性善だというのはよく言われるが、実はそれは本来そうなる素養があると言うことに過ぎない。四端なのであって、努力をして性善を実現すべきだ、と孟子は考えたという。human becoming という表現は実に的確だと思う。これは安富歩『生きるための論語』(ちくま新書, 2012年)などでつとに語られているところだ。

教養動画メディア そんな動画による講演から進んで、1話10分で学ぶ教養動画メディア 10 MTV というサイトに行き当たりました。そのサイトは、東京大学をはじめとする日本の大学教授や一流企業の経営者、特定分野の世界的権威である医師など、多分野の有識者が出演する教養メディアだと紹介されています。有料サイトではありますが、これなら有料の意味はありそうです。そのサイトで中島隆博氏の「講義」を調べると、いろいろなのがアップされているのがわかりました。これもおすすめです。

東洋の普遍、西洋の普遍 その中での中島隆博氏の最新の講義は「東洋の普遍、西洋の普遍」というものでした。明治維新以後、とりわけ第2次大戦以後日本は西欧一辺倒(第2次大戦後はアメリカ一辺倒)で来すぎているのではないかと思っただけに、西洋だけが普遍だと考えるのはいかなものかという含意がある。東洋の普遍との統合によって、普遍を深めようというわけである。振り返ってみると、その考えはすでに1960年代から

竹内好氏が提唱していたという。これは中島氏の紹介によるが、原典に当たるきっかけになった。すなわち、「西欧的な優れた文化価値を、より大規模に実現するために、西洋をもう一度東洋によって包み直す。逆に西洋自身をこちらから変革する。この文化的な巻き返し、あるいは価値の上の巻き返しによって普遍性を作り出す。これが大事なのだ。東洋の力は西洋の生み出した普遍的な価値を、より高めるために西洋を変革する。これが、東対西の今の問題点である。これは、政治上の問題である」(竹内好「方法としてのアジア」中島隆博「現代中国思想が元ネタにした竹内好『方法としてのアジア』」http://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=1380より)

儒教の革新と活用 東洋の普遍の淵源に儒教がある。中国も日本もある意味儒教を捨て去ったけれど、近年は中国でも儒教が見直されてきているという。台湾などの新儒家という人たちがその先鞭をつけていたという。すなわち、

「新儒家の人々が懸命に考えたのは、『儒教を放棄することなく、しかし近代の中で持続させていくには何が大事なのか』ということです。もっと端的に言うてしまうと、『儒教と民主主義』や『儒教と科学』をどのように結合させていけばいいのかが、最大のテーマになっていきました。これは、なかなか容易ではないテーマだと思います。しかし、それを通じて儒教自体を練り直していく。批判的に検証し直していく。こういった努力を彼らはずっとやってきたのです。

それと同時に、台湾は経済的にも非常に成功していき、民主主義的な社会としてもある種の成熟を遂げていきます。このようなプロセスを経ていった「台湾モデル」というものは、儒教の世界では決して無視できないものだと思います。」(中島隆博「現代中国の儒教復興(4)ポスト世俗化時代の宗教の意味」http://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=429より)

しかし実は、中島は中国以上に日本は儒教をそれなりに利用してきたのではないかという。すなわち、

「日本の場合、特に戦後においては、儒教に対する関心が急速に薄れていきます。しかし、振り返ってみますと、日本の近代は、中国と異なり、儒教を大変うまく利用した時代であったと言うことができます。」(中島隆博「現代中国の儒教復興(1)国家のレジティマシーと儒教」http://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=392より)

中国での儒教の復権 今や中国でも儒教の復権が進んでいるという。「『封建的思想』『近

代化を阻害する要因』などの理由で、150年にわたって抑圧されてきた儒教が今、中国で急速に復興しつつある。これは、近代化のために儒教を利用しつつも、戦後は関心が薄れてしまった日本とは対照的な現象だ。2008年の北京オリンピックの開幕式で、当時の中国政府が唱えていた『和諧社会』という方針とも合致する『和』の概念がクローズアップされたのも、儒教的な概念の復活と言えよう。

そこには、毛沢東亡き後、『市場経済』という言葉で資本主義を導入し、『社会主義市場経済』を実現しようという新しいフェーズに入った中国が、そのレジティマシー(正当性/正統性)を保証するために揺るぎない拠り所を必要としたという背景がある。その拠り所の候補となった『中国の伝統文化』の中心に位置するのが儒教なのだ。ただし、中国では、宗教としての『儒教』ではなく、学問的要素を併せ持った『儒学』をレジティマシーの拠り所として使っていくという判断がなされている。」(中島隆博「現代中国の儒教復興(1)国家のレジティマシーと儒教」http://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=392より)

西欧由来の資本主義が行き詰まっている。今や儒教はそれを救う可能性を秘めているかもしれない。すなわち、「資本主義を欲求と欲望に区別すれば、欲求は身体的、生理的な充足を目指していくのに対して、欲望は『他者の欲望を欲望する』と定義され、無際限になり得る可能性を持っている。」(中島隆博「グローバル化時代の資本主義の精神(1)資本主義の機制」http://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=540より)

欲望が無際限に解放されたのが近代資本主義であった。しかしそれが限界にきていることは間違いない。儒教を学ぶ意義もそこに見出すことができる。欲望をある規範の下で抑制してきたからこそ、人類はここまで生き延びてきたことは間違いない。現在そのタガが外れてしまっている。これを歴史に学びながら、考え直していきたいと思っている。そのために有用な本も見つけた。今読み始めたところである。小野塚知二『経済史 いまを知り、未来を生きるために』(有斐閣,2018年)がそれである。松村通信統編で改めて紹介したい。

HP, FBを見て下さい。又何でも意見を。
皆様のご意見を歓迎します。HP
(<http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/>)もご覧下さい。
フェイスブックもやっています。また、メールで意見
交換しましょう。メールをよこして下さい
(matumura@mba.ritsumei.ac.jp)。